実践報告

国語科

報告者：塚越　麻友美

１　課　題

本校では読解力の育成を学習指導の目標としている。読解と一口にいっても少なくとも、「単語」「文」「段落」「文章」の４つの段階に分けて考える必要がある。本校生徒は「単語」、つまり語彙力や「文」の段階から躓いていると思われる。

２　目　標

授業の中では、教科書に登場した難解な語彙を解説することはもちろん、それらの類義語、対義語にも触れ、徐々に生徒の語彙力を増強していく。

３　具体的方策

一つは、授業内で毎週漢字小テストを実施することである。語彙力、読解力は一朝一夕に向上するものではない。目に見える結果が出るまでに時間がかかるため、生徒は前向きに学習に向き合うことが難しくなると想像できる。すぐに点数に結びつかなくとも、学習に対する姿勢や努力を認め価値づける言動を実践することで、生徒の意欲を持続させたい。

第１学年では『羅生門』を扱いながら難解な語彙について解説し、小説世界の読解を進めていった。例えば「衰微」という言葉においては、漢字それぞれの字訓に着目した。初見の熟語に出会った際に、文章を読み進めようとする意欲を失ってしまうのではなく、以上のように漢字の意味を考えながらテキストと向き合う姿勢を涵養していく。

４　結　果

様々なテキストにおいて本文中の二字熟語を取り上げ、それら二字が用いられている別の熟語を生徒に挙げるよう促し続けたところ、年度当初よりも様々な熟語が挙がるようになった。

「命」を例にした時には、「生命」「運命」「命令」といった熟語が生徒から挙がり、「命」の字訓について生徒自らが気づきを得ているような場面も見受けられた。

５　次年度に向けての課題

語彙に関する指導は国語科において必要不可欠なものであるが、短い授業時間の大部分をそれに割くことはできない。評論においても小説においても、その教材で「何を」学ぶか、ということも同時に考えながら授業の設計をしていくべきであると感じた。

次年度は、漢字テストや授業内で扱った語彙を、生徒の理解語彙から使用語彙に引き上げられるような取り組みも考え、定期考査等で到達度を確認したい。